3年B組
金八先生

飛べよ、鳩

小山内美江子

高校生文化研究会

3年B組
金八先生

飛べよ、鳩

小山内美江子

高校生文化研究会

小山内美江子（おさない　みえこ）
1930年，横浜に生まれる。シナリオ作家。代表作に「加奈子」「愛がわたしを」「親と子と」「マー姉ちゃん」「もうひとつの道」など。著書に『十五歳の愛』『いのちの春』（高文研）『母と子の旅立ち』『母と子の金八先生への道』（労働旬報社）『すばらしき遭難』（旺文社）などがある。日本シナリオ作家協会会員。

3年B組金八先生　飛べよ、鳩

一九八〇年一二月　一日――第一刷発行
一九八〇年一二月一〇日――第二刷発行

★定価　八〇〇円

著　者／小山内美江子
発行所／高校生文化研究会
東京都千代田区猿楽町二―一―八
三恵ビル内（〒101）
電話　03―295―3415
振替口座番号　東京6―18956
印刷・製本／凸版印刷株式会社

★乱丁・落丁本については、送料当方負担でお取りかえいたします。

© M. Osanai. *printed in Japan.* 1980 0093-30003-2471

鳩は、空を飛ぶ。
鳩は、空を飛ばなくてはいけない。
けれども、いま、
鳩はいたるところで傷つき、
つばさ萎え、目を閉じ……。
飛べない鳩。
飛ぼうとしない鳩。
だが鳩は、空を飛ばなくてはいけない。

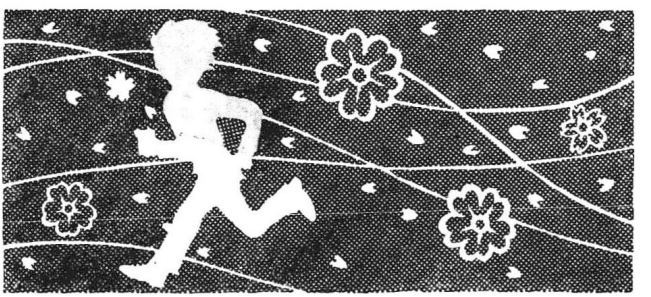
鳩よ、飛べ！
飛べよ、鳩！

もくじ

Ⅰ 思春期内科 5
Ⅱ そのひと言 33
Ⅲ 捨てられた心 61
Ⅳ いじめっ子防衛法 89
Ⅴ 父は偉大なり 119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

Ⅵ 転校生 147
Ⅶ 腐ったミカン 169
Ⅷ 対決の夜 193
Ⅸ 一本の旗 219
あとがき 236



カバー・扉＝絵　勝又　進

写真　TBS提供

I　思春期内科

昨日までは気がつかなかった甘い香りに、金八先生は足をとめた。見上げると、きんもくせいが、オレンジ色の小さな花を葉の間からのぞかせている。そういえば、去年、桜中学に転任してきた日も、この甘い香りに思わず立ちどまったような覚えがある。《この道を通い始めて、ちょうど一年か……》金八先生は、過ぎ去っていった時の流れを感じて、またきんもくせいの木を見上げた。

「お早うございます、先生」

懐かしい声に、金八先生は振り返った。浅井雪乃である。

「お早う。ホウ、大きくなったなア」

金八先生は、顔いっぱいに笑(え)みを浮かべて、雪乃の腕に抱かれた歩(あゆみ)をのぞきこんだ。そのとたん、歩は唇をへの字に曲げて、クルッと背を向け、まだ幼い母にしがみついてしまった。

「アラ、歩くん、どうしたの。先生、好きだったでしょ」

あわててあやす雪乃の声にも、歩はまだ小さな手にこめた力をゆるめようとはしない。

「すみません、先生、このごろ急に人見知りするようになって」

「いいんだいいんだ、それが、確実に成長したという証拠なんだから。ねえ、歩くん」

金八先生は、自分の意志を見せはじめた幼い命に、あらためて時の重みを感ぜずにはいられな

かった。十五歳の少女が妊娠したことを知ったときのショックも、子どもを産むという雪乃のかたい決意を前にしたときの困惑も、すべてがもう遠い過去の出来事のように思われる。あれから雪乃は、一度は追われるようにして出た実家へ戻り、そこから将来を誓い合った宮沢保の父の建築事務所に通っている。歩を抱きあげる雪乃のしぐさの一つひとつにも、母としての揺ぎない自信のようなものが感じられた。

「八カ月、になるかな」

「ええ、もう危なくて。ちょっと目を離すと、這い這いで階段まで上がろうとするんですもの」

穏やかな微笑を浮かべて言う雪乃に、金八先生もほほえんでうなずいた。

「早く歩くようになるといいんですけど」

「あせることはないさ、浅井。今のうち、うんと這い這いさせなさい。思いきり這いずりまわって、そのうちつかまり立ちを始めて、それから、ゆっくり歩く。人間、途中をはしょると、どこかでその歪みが出るからね」

「ええ――」

雪乃は、少し考えこんで、ポツリと口を開いた。

「そうだったのかしら、お兄ちゃんも」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「え？」

「勉強ばかりして、レコード聞いたり、お友だちとおしゃべりしたりするのをはぶいたから」

都内でも有数の私立進学校から、東大をめざし、初めての挫折でみずからの命を絶った雪乃の兄。今でも金八先生の胸は痛む。

「そうかもしれないね」

金八先生に、それ以上ことばはない。そのとき、また懐かしい声が金八先生を呼んだ。父の病気で、進学を断念し、家業の乾物屋を継いで一家を背負っている安藤卓だ。

「おう、卓ちゃん、お早う」

自転車の荷台にショウ油を積んだ卓が、ブレーキを軋ませて横にとまった。

「あいかわらず頑張ってるな」

「まァネ」

ニコッと笑った卓が、雪乃の腕の中の歩に顔を向けると、それまで機嫌の良くなかった歩が、急にコロコロと笑い声をたてた。

「笑ったよ、先生。笑うと、宮沢そっくりだネ」

「う、うん」

自分には顔をそむけた歩が、卓には声をあげて笑っている。金八先生は少し淋しい気がした。その気持ちを察したように、雪乃があわてて口を添えた。

「卓ちゃんは、しょっちゅう歩に会っているから」

「うん、そうだね」

雪乃たちが桜中学を巣立って、ほぼ半年。その間、もと三年B組の生徒たちとは学校の行き帰りにこうして顔を会わせるだけで、ゆっくり語り合ったことはほとんどなかったといっていい。さまざまな事件を起こし、金八先生を引きずりまわした生徒たち。それだけに愛着は深かったが、今、金八先生に過去を懐かしむ余裕はない。なぜなら、今年もまた、去年に輪をかけて手のかかる三年B組の担任を引き受けていたからである。

「コラーッ、静かにせんかァ」

三年B組の教室に、金八先生の声が響きわたった。朝の学活の時間である。

「だってさァ」

「だってもヘチマもないッ」

そのくらいの声で騒ぎがおさまらないのは、もちろん、去年と同じだ。二週間後にひかえた学

級新聞コンクール。今日の放課後は、その第一回目の打ち合わせ会議である。迫りくる高校受験を前に、一人ひとりが自分のカラの中に閉じこもり、ほうっておけばバラバラになりがちの生徒たち。その生徒たちが、心をひらいて全員で力を合わせてとりくむのに、新聞コンクールはいい機会だ。そう考えて、金八先生もアドバイザーとして会議に参加することに決めていた。

「いいか、いつまでもそうやって騒いでいたら、話はちっとも前に進まないじゃないか！　お前たちは、いつになったらちゃんと――」

「だから、ちゃんと話し合ってんじゃないの」

騒動屋の繁好が声をあげると、お調子者の広二がいつものように尻馬に乗り、騒ぎはさらに大きくなった。

「静かにッ！　そんなにどならなくてもちゃんと話しは通じるんだから、少しは隣りの教室の迷惑も考えて……」

時すでに遅しというか、ガラッとドアが開いて姿を現わしたのは、隣りの教室の主（ぬし）、A組の担任で学年主任の上林先生である。瞬間、それまでの騒々しさは潮がひくように消えた。

「どうも、いつもいつも申しわけありません」

金八先生が、パッと最敬礼すると、上林先生はその頭ごしに教室内をジロリと見まわし、一言

も発せずにドアを閉めて姿を消した。金八先生はフーッとひとつ、大きなため息をもらした。その様子に、不満そうに声をあげたのは八重子だ。
「騒いでたのは私たちなんだから、何も先生がそんなにペコペコ謝まることないでしょ」
「そうだよ、そうやって金八っつぁんが低姿勢だから、オレたちまで頭が上がんなくなるんじゃないか」
「バカね、私は金八先生のせいじゃないと言ってるの」
尻馬に乗った広二を、八重子がピシッとたしなめたが、教室には次々に不満の声があがる。
「陰険だよな、あの先生は」
「そうだよ、文句あんなら言やあいいのに」
「オウ、こっちはいつだってタイマン張る覚悟はできてんだから」
調子に乗ったB組一番のツッパリ、悟の芝居がかった声に、金八先生の激しい声がとんだ。
「きいたふうなことを言うんじゃないッ！　俺はそういうふうに責任転嫁をする奴がいちばん嫌いなんだ。朝の学活は、その日一日のいちばん大切な時間なんだ。A組にとってもその大切な時間を、わがB組が邪魔した。だから、B組担任が、A組の担任に謝まった。これは当然のことだろ。さげるべき頭はさげる」

ひと息ついて、金八先生はみんなを見まわした。
「さあ、次は、騒いだお前たちが私に謝まる番だ。でないと、昼からの新聞づくりは中止する」
「そんなの、イヤーン」
「オウ、賛成賛成」
「新聞なんて、もうカッタルくてやってらんないよ」
「なによ、いまさら」
「この忙しい二学期に、新聞づくりはないだろ」
口ぐちに生徒たちが声をあげ、再びハチの巣をつついたような騒々しさが襲ったその時、学級委員の康男が、「シーッ」と緊張した顔でみんなを制した。
「また、来たぞ」
康男の声に、誰もが一瞬息を呑んだ。静けさの中に、ドアをノックする音がひときわ大きく聞こえる。上林先生に違いない。生徒たちは入学した時からずっと持ち上がってきた上林先生の恐さを、身にしみて感じていた。大声でどなりまくるわけでも、ネチネチといびるわけでもない。それは、全身から発する一種の威厳のようなものである。それだけに、誰もが不気味な怖れを感じていた。金八先生も緊張してドアの前に進み、姿勢をただした。

「たびたび、どうも……」

言いながらドアを開けた金八先生は、ホッと安堵の息をもらした。目の前にいるのは悦子先生である。だが、悦子先生の顔はこわばっていた。

「あの、何か——」

悦子先生は、金八先生の耳元に口を寄せた。生徒たちが、いっせいに冷やかしの声をあげる。悦子先生はあわてて金八先生から顔を離した。

「福岡の病院から、お電話です」

「福岡の？」

「もしかしたら……」

「母ちゃん……」

福岡、病院、実家、年老いた母——金八先生の心にドス黒い不安がわきおこる。瞬間、金八先生は、もう駆けだしていた。

「モシモシ、金八ばって、母ちゃんがどげんしたとね！」

職員室にとびこみ、受話器をにぎるが早いか、金八先生は、せきこんで大声をあげた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com